

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子……絵画修復家

今年夏は暑かったし、何度も台風がやってきて、おかしな気象でしたね。

そんな8月のある暑い一日に、私はかねてより念願の現代美術作家であるリー・ウーファン氏を鎌倉のご自宅に訪ね、4時間もの長時間、対談する事が出来ました。

私は足掛け数年の間、NHK出版から一冊の本を書くように言われているのですが、忙しさに加えてサボってきたのに加えて、なかなか書きあがらないのは、この本の最終章で数名の現代美術作家に会ってインタビューを試み、その作家がどのような素材で制作をし、またどのような意図で制作をし、そして自分の作品が、恒久的に（それが無理だとしても、半永久的に）保存されてゆ

く、（自分の死後にも残ってゆく）ということや意識の内においているか否か、ということや、それぞれの言葉、哲学的な、またはポエティックにでも良いので、答えて頂きたかったのです。

これは、ともすればアカデミックな観点にこり固まりがちの修復家の意識の変革を促す事、また、コレクターや美術館、つまり大枚をはたいて作品を買取る側にも現在のアートシーンの現状、例えばモノ派以降の、またはアース・ワークなどの作家の意図する制作姿勢を再認識していただいて、朽ちはてていくこともひとつの芸術の形である、

ということもあるのだと云う事を、修復家がそれを理解し、手を加えるのを控えるべき事もあり、そして残念ながら購入者もそれを傍観するべき場合もある、そんな時代に至りつつある事を、ある意味でこの本の中で作家達の遺書とでも言うべき言葉を残す、そんな項にしてみたかったです。

修復者は、ルネッサンス期からの伝統的絵画技法、つまりいかに後世に残すのか、という絵画技法を基本的に学んできています。そして、科学的知識に基づいてそれらを未来に残すべく、特殊な手法で修復する技術を身に付ける。そしてこの一方で、現在起きている、例えばゴールズワージーの木の葉を使った作品など、全く保存など念頭に置いていない、正反対な芸術的動きのあること、そして思っても見えない新たな素材の使用など、（吉

澤みかの作品に見られる、塩ビのパネルのような）ますます仕事に要求される知識は膨大なものになってきているのです。特に、作者の意図、哲学的スタンスを知っている事はとても重要です。

こうした事は、私自身が修復の傍ら、作品を制作するに当たって、アカデミックな普通の油彩画から、だんだんに抽象に移行してきた時から、認識が深まってきたようです。修復家のくせに、作品を作るときはあまり後世に残る事は意識して制作していません。さすがに油の上にアクリルを乗せたり、なんて、変なことはいらないけど、むしろこうしたら持ちが良くなる、という事は意識のうちにあるとしても、制作の際にはむしろ精神を開放に向かわせる事に励んだりする。だって、丈夫な、何世紀も残る作品を作るのは、大体に於いて素材や技法に限られてくるでしょ。そんなことは判ってる。しかしそこから離れたい。

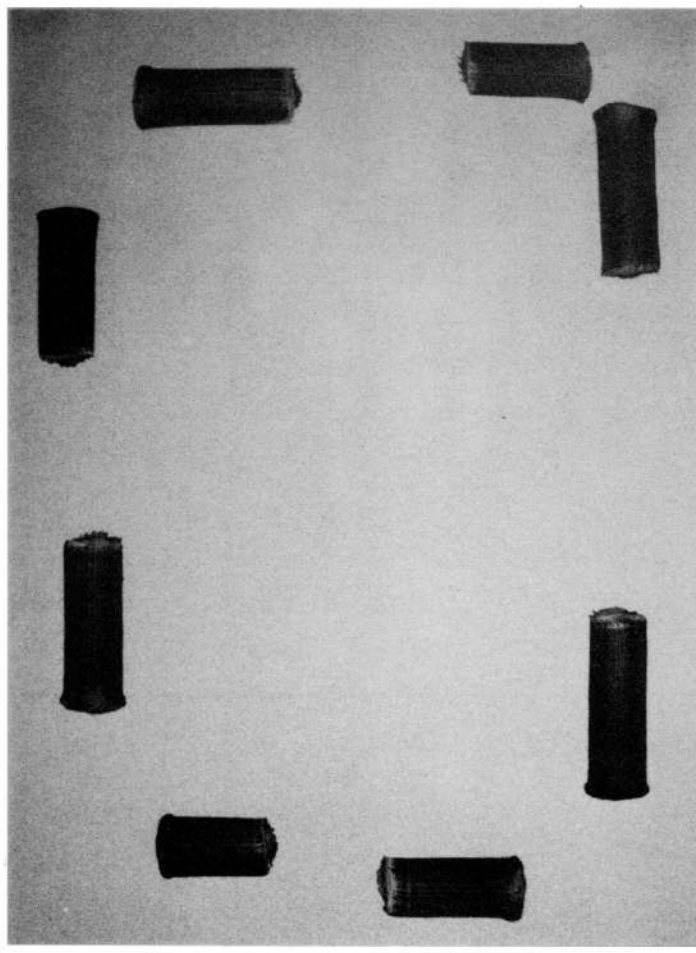
そこで、モノ派の哲学を語らせたならこれ以上優れた方は居ないであろう、と言われる、リーさんに、こともあろうに素材というものの必然性、ひいては余白と言うもののリーさんの捉え方、劣化というものの美について、だなんて質問をつっこんで聞いてしまった。以前に、こういう本を書くんです、と何の気なしに鎌倉近代の酒井館長にお話して

「キミ、リーさんにそんなこと聞くなんで10年

早いよ、キミがモノ派についてどれだけ判っているの」

と、叱られてしまった事があった。そう。本当に、すっごく難しい。ケイジジョウガクって何!? と言う私だもの。それから、どんなにリーさんの書かれたテキストや、本を読んだか判らない。でも、いつだって自信がついたことなんて無かった。それで、鎌倉の蟬が鳴く山を登っている間も、ああ、どうしよう、とうとうこんな日が来てしまった、

リー・ウーファン氏の作品「照応」
1992年、油彩、キャンバス



私、稚拙な事はかり言ってしまうそう！ と怯えていたのです。

白くてすっきりした、いかにもリーさんらしいお宅について、膨大な書物のあるお部屋に通されながら、2階の夏の緑深い山々を眺められる椅子に座ってリーさんと面と向かった時に、怖い方なではないか、と思っていた私の予測に反して、とても優しい表情をなさっていたので、安心して、というか、今更何を気負ってもしようがないや、オープンマインドで行こう、と勝手に決心をし、なんだか一生懸命自分の意図を説明。

そして、リーさんが開口一番、そのような視点で修復を語る、現代美術を語る試みは初めてで、とてもいいと思う、と言うような事を言っていた。だいた時には、気絶したいほど嬉しかった！
さて、びっくりするほど親切に、精力的に、少し嬉しそうに、リーさんは暫らく高いところの倉庫でガタガタ探して、昔描いた作品を見せて下さいました。

それは、最近制作している薄墨色の配色やテクスチャーとは異なる、昔の作品の筆の痕跡だった。これらの作品を並べると、同じように筆に絵具を含ませて置かれていく、ひと塗りの絵具の塊が、どのような観念に、意志に、研ぎ澄まされ、選り抜かれてきたかが痛いほど判る。その素材の選択、それを選んだ必然性。結論から言えば、リ

ーさんは作品が劣化してゆく事を否と言う立場をとらないそうです。白と言う緊張感がたとえ変質しても、風化と言う美をむしろ積極的に美として受け止める事にする、とおっしゃいました。（詳しいはいつか出版される！ 私の本を見てくださ

い）
あ、ちなみに使われていたキャンバスは船岡の特注ものでした。3回の塗りを施したその表面は、素晴らしく、いい匂いがして、きつといつか風化をしていったとしても、上品で重厚な質感を見せてくれるのでしょうか。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。